

## (2) 地域における終末糖化産物と血管硬化度に着目した健康寿命延伸への取り組み

就実大学薬学部 薬物治療学研究室 講師 出石恭久

日本は現在、超高齢社会に突入しており、医療費や介護保険給付費の増加といった深刻な課題に直面している。その一因として、健康寿命が平均寿命より約10年短く、その期間に多くの医療・介護サービスを必要とするため、社会保障費の負担が大きくなっている。こうした状況を踏まえ、専門的医療に依存するのではなく、地域医療の中で健康維持や疾病予防、さらに基礎疾患の重症化を防ぐ取り組みによって健康寿命を延ばすことができれば、国民がより充実した生活を送れる期間が延長されると同時に、社会保障費の軽減にもつながると期待される。特に循環器系疾患は医療費が最も高額であり、死因の上位にも位置していることから、早急な予防・対策が必要とされている。

我々はこれまで、地域における予防医療や健康増進に薬剤師がどのように貢献できるかを探る目的で、薬学部附属薬局を拠点として終末糖化産物（AGEs）に着目した健康リスク評価に関する臨床研究を行ってきた。AGEsは、たんぱく質や脂質の糖化反応により生成され、酸化ストレスの産生を介して炎症反応を誘発し、脳心血管疾患や糖尿病等の慢性疾患の発症リスクを高めることが知られている。このAGEsは皮下組織に蓄積すると特有の自家蛍光（SAF）を発するため、我々はこのSAFの蛍光強度を非侵襲的に測定することで、簡便かつ安全にAGEsの蓄積量を評価した。

その結果、中高年者ではSAFと年齢の相関性が消失し、SAFが白血球数と関連していることが明らかとなった。白血球数の増加は、脳心血管疾患による死亡リスクの上昇と関係していることが報告されており、SAFの評価を通じて循環器系疾患のリスクを把握できる可能性が示唆された。

現在はさらに血管機能に着目し、SAFと血管硬化度との関連性についての研究を進めている。本発表では、これらの研究成果を踏まえ、地域における循環器疾患の予防や健康支援の新たな可能性について議論したいと考えている。